

「悪かった」が言える (マタイの福音書 21 章 28-32 節) 2021.11.7.

<はじめに> この聖書箇所で「あれっ?」と思った方もあるでしょう。他の訳の聖書とは兄と弟が入れ替わっています。聖書は長らく書き写して複製してきました(写本)。その写本間に相違があり、学者たちがそれらを研究し、その成果に基づいて原本により近い校訂本を今も更新しています。

謝罪に接すると、本当に過ちを認めて心から詫びているのか、形だけの謝罪なのかは、何となく伝わって来ます。「悪かった」「間違った」という言葉を何としても避けようとする人もいます。これを言う、本当にすべてが終わってしまうのでしょうか。イエスは一つの物語を通して問い掛けます。

I 父と息子たちのたとえ話

①父の願い(28)

父は「今日、ぶどう園に行っておいでしてくれ」(28)と、まず兄に、それから弟に声を掛けます。息子たちは決して幼くはなく、大人でしょう。家人に家業のために働いてもらうことは、親としては自然な願いです。しかし、息子たちとしてはうれしくなかったのでしょうか。

②息子たちの応答(29-30)

兄も弟も父の依頼を受けて、すぐにぶどう園に赴きません。そこは共通です。しかし、兄は「行きたくありません」(29)と返事し、弟は「行きます」(30)と言います。後で兄は父に断つたことを思い直してぶどう園に出向きますが、弟は最後までぶどう園に行きません。

③イエスの問い掛け(31)

イエスはこのたとえ話を聞いている<あなたがた>に問い掛けます。それは遡ると「祭司長、民の長老たち」(23)で宗教指導者です。「二人のうちのどちらが父の願ったとおりにしたのでしょうか」に、彼らは「兄です」と答えました。そう答えたのは、なぜでしょう。

II たとえ話が示す道

①神の願い

たとえ話の父は神様で、その願いは神の国に入る(31)ことです。代々の預言者やバプテスマのヨハネは「悔い改めよ」(マタイ 3:2)と義の道を示します(32)。罪深いと見られていた取税人や遊女はそれを信じましたが、<あなたがた>はそれを見ても、なお信じません。

②「悪かった」が言えるか

罪を犯さず、きよく正しく歩めるのがベストですが、人は過ち・罪を犯す弱者です。だからこそ神は、助け主なる聖霊を遣わして、「罪について、義について、さばきについて、世の誤りを明らかになさいます」(ヨハネ 16:8)。その促しにどう答えますか。

③告白するなら

「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます」(Iヨハネ 1:9)。「悪かった」と認めて改めることは、神の前に義しい道です。これが救い主イエスによって打ち建てられています。

<おわりに> 失敗してもやり直せる道が神の前にはあります。「あなたがたより先に」(31)は、拒んでいる者にも、まだやり直せるチャンスが残されていることを示しています。聖餐式は主イエスからの招きの声を聞き、応えるチャンスです。(H.M.)